

珍しい酒もり

小川未明

青空文庫

北きたの国くにの王おうさまは、なにか目めをたのしませ、心こころを喜よろこばせるような、おもしろいことはな
いものかと思おもつていられました。毎まい日にち、毎まい日にち、同おなじような、単たん調ちような景け色しきを見みるこ
とに怠たい屈くつされたのであります。

このとき、南みなみの国くにへ使つかいにいつた、家来けらいが帰かえつてまいりました。なにかおもしろい話はなしを
持もつてこないかと、さつそく、その家来けらいにご面会めんかいになりました。

「ご苦勞くろうだった。無事ぶじにいつてこられて、なにより、けつこうのことだ。南みなみの国こく王おうは、
達者たつしゃでいらせられたか……。」と、おたずねになりました。

家来けらいは、長ながい旅たびをしたので、顔かおの色いろは、日ひに焼やけて、頭髪とうはつは、雨あめや、風かぜに、たびたび
遇おうたことを思おもわせるように、伸のびて乱みだれていました。

「南みなみの国こく王おうは、お達者たつしゃでいらせられます。そして、毎まい日にち、愉ゆ快かいにお暮くらしになつて
いらせられます。帰かえつたら、よろしく申もうしあげてくれいとの、お言葉ことばでありました。」と、
家来けらいは、申もうしあげました。

北きたの国くにの王おうさまは、うなずかれてから、

「それは、けつこうなことだ。しかし、ほんとうに南みなみの国こく王おうは、愉ゆ快かいに日ひを送おくつて、お

いでなされるか？」と、問いました。

家来は、両手を下について、

「毎日、それはそれは愉快に、日を暮らしていらされます。南の方は、こちらよりは、ずっと日が長いように思われますが、それでも、国王は、短いといつて、嘆いていられたほどであります……。」と、お答え申したのでした。

北の国王は、不思議のように思われました。自分には、どうして南の国のような、楽しいことがないのだろうか、かなしく思われたのでした。

「自分は、明けても、暮れても、この単調な景色を見るのに飽きてしまった。やがて、広い野原は、雪におおわれることであろう。どうして、自分には、そうしたおもしろいことがないのであるか？」と、おっしゃられました。

家来は、王さまの顔を見上げながら、

「南の国王も、かつては、お怠屈でいらせられたようでございます。しかるに、一度、城下にさまよっています、あらゆる哀れな宿なしどもをお集めなされて、ごちそうなされ、彼らが見たり、聞いたりした、珍しいことを、なんなりと言上いたせよと、命令あったために、彼らは、いろいろのことを申しあげたのであります。彼ら、宿なし

どもは、北きたといわず、南みなみといわず、西にしといわず、東ひがしといわず、平常へいじょう諸方しよほうをあるきまわっていますから、世よの中の不思議ふしぎなことを知しっていました。また、彼らかれの中には、まれには、学者がくしやのおちぶれも、まじっていますので、およびもつかない天界てんかいのことや、または吉きつ凶きようの予言よげんみたいなことまでも申もうしあげます。……それ以来いらいというもの、国王こくおうは、世よの中の、いろいろなことに、ご興味きょうみをもたせられて、あるときは、ご旅行りょこうをあらそばされ、またあるときは、ご研究けんきゆうに月日つきひをお費ついやしあそばされるといふうであります。……と、申もうしあげました。

北きたの国くにの王おうさまは、しばらく、頭あたまを傾かたむけて、お考えかんがなされました。

「なるほど、みようなところへお氣きをつかれたものだ。それで、彼らかれは、どんな話はなしを言い上ういたしたか、それをば聞きかなかったか……。」と、王おうさまはいわれたのです。

家来けらいは、いま、そのことを申もうしあげようと思おもっていましたから、すぐに、

「私わたしが、こちらへ歸かえります時分じぶんには、王おうは、南みなみの島しまへ船ふねを出だされて、その島しまの山谷さんくに咲さいているらんの花はなをとりにまいられました。その美しいことは、いかなる花はなも比較ひかくにならず、また、その香かりの高たかいことは、谷たにを渡わたって吹ふいてくる風かぜに、花はなの咲さいていることが知しれるほどです……。また、笛ふえを、吹ふくと踊おどりだす、白しろいへびのすんでいるところや、人にんげ

間の言葉^{ことば}をまねする鳥^{とり}の巢^すのありかなどを、彼^{かれ}らは申しあげたので、王^{おう}は、それらを獵^{りよう}をされにお出^でかけになったのであります……。」

「それは、さだめしおもしろいことであろう。しかし、そうしたあそびごととも、南^{なん}国^{こく}だからされるのである。こちらのように、半^{はん}年^{とし}は冬^{ふゆ}、半^{はん}年^{とし}は夏^{なつ}というような国^{くに}には、そんな鳥^{とり}もすんでいなければ、珍^{めず}しい花^{はな}も咲^さいていない。ほんとうに、こういう国^{こく}土^どに生まれたもの^{もの}の不^ふしあわせというものだ。」と、北^{きた}の国^{くに}の王^{おう}さまは、いわれたのであります。家^け来^{らい}は、うつむいて、しばらく考^{かん}えているようすでありました。

「しかし、わが王^{おう}さま、また、この寒^{さむ}い国^{くに}には、別^{べつ}な珍^{めず}しいものがあるであります。一度^ど、この国^{くに}の宿^{やど}なしどもを、お招^{まね}きになり、ごちそうなされたら、また、いかなる珍^{めず}しい話^{はなし}を、お聞^ききなさらぬともかぎりますまい。」と、申^{もう}しあげました。

「それも、おもしろい企^くてにはちがいないが、この地方^{ちほう}の宿^{やど}なしどもは、そんな珍^{めず}しい話^{はなし}を持^もっているようにも思^{おも}われない……。」と、王^{おう}さまは、いわれて、すぐに、お呼^よびなさろうとはなされませんでした。

しだいに寒^{さむ}くなつて、いつしか冬^{ふゆ}とはなりました。空^{そら}は、くらく、野^の原^{はら}には、風^{かぜ}が、枯^かれた枝^{えだ}にさけんでいました。

王さまは、毎日、このさびしい、寒い景色を見て、日を暮らすことに怠屈なされました。雪が降つてきて、あたりは真つ白になり、やがて、その年も暮れて、正月になろうとしたのであります。

「どんなにか、宿なしどもや、乞食らが、この寒さになやんでいることだろう。彼らは、楽しいお正月を迎えることもできない。なかには、災難から、そうおちぶれてしまったものもある。事情を聞いたら、いずれも、気の毒なものばかりのように思われる。彼らからいろいろの話を聞くだけでも無益ではないであろうから、正月には、彼らを招いて、ひとつ盛大な宴会を開いて、みようと思う……。」

王さまは、こんなことを頭の中に描かれました。そして、その旨をさつそく、家来たちに申しわたされたのであります。

家来たちは、いずれも、そのお考えなされたことが、たいへんによいことであり、また、おもしろいことだといわぬものはなかったのです。

「いや、北の国には、また、南の国と違った、いろいろの不思議なこと、珍しいことがあるであろう。はやく王さまに、宿なしどもや、乞食の申しあげてを自分らも聞きたいものだ。」と、南の国へ使いにいつて帰つてきた、家来などはいったのであります。

しかし、北^{きた}の方^{ほう}の王^{おう}さまは、なんとなく、それほど期待^{きたい}をされていませんでした。いよいよ王^{おう}さまが宿^{やど}なしどもや、乞食^{こじき}どもを、お招^{まね}きなされて、盛大^{せいたい}なご宴^{えんかい}会^{ひら}を開^{ひら}かれるというふれが、いたるところに、はられましたから、好きな酒^{さけ}も飲^のめずに、貧乏^{びんぼう}に苦^{くる}しんでいる人^{ひと}たちは、しかも、王^{おう}さまのお召^めしで、たくさん好き^すなものをいただけるというのだから、たいへんにありがたいことと思^{おも}つて、その日^ひの至^{いた}るのを喜^{よろこ}んで待^まっていました。

ここに、だれもゆかないような、さびしい海岸^{かいがん}に、波^{なみ}で打ち上^あげられたものか、こわれた船^{ふね}がある、その中^{なか}に住^すんでいる老人^{ろうじん}がありました。この老人^{ろうじん}は、いつごろから、そこに住^すんでいるのか、だれも知^しつたものがありません。そして、ようすから見^みて、どうやら、この地方^{ちほう}の人^{ひと}ではないようにも思^{おも}われました。

ある日^ひ、この老人^{ろうじん}は、村^{むら}の方^{ほう}へ出^でてゆきました。そして、王^{おう}さまが宿^{やど}なしどもや、乞食^{こじき}たちをお集^{あつ}めなされて、正^{しょう}月^{がつ}のご宴^{えん}を開^{ひら}かれるということを聞^きいたのです。

「私^{わたし}も、ぜひまいつてみたいものだ。」と、老人^{ろうじん}はいいました。

どこからともなく、たくさん^{あや}の怪^{あや}しげなふうをした人^{にんげん}間^{かん}が、城^{じょう}下^かへ集^{あつ}まってまいりました。毎日^{まいにち}、毎日^{まいにち}、雪道^{ゆきみち}をあるいて、遠^{とほ}くから、ぞろぞろと入^{はい}ってきました。

やがて、正月しょうがつとなり、その日ひとはなつたのです。さすがに、広いひろ、大きな、御殿ごてんへも、これらの人ひとたちは、はいりきれなかつたのでした。しかたなく、雪ゆきの上うえへ、むしろを敷しいて、その上うえにすわらなければならなかつた。

王おうさまのお言葉ことばで、みんなに、上等じやうとうの酒さけがふるまわれました。そこで、その日ひばかりは、特別とくべつに無礼ぶれいのことにないかぎり、彼かれらはくつろいで飲のんでも、いいとのことであつたから、みんなは、上機嫌じやうきげんになつてしまいました。

そのとき、家来けらいは、立ち上あがつて、彼かれらに向むかつて、

「王おうさまのお言葉ことばである。いままで不思議ふしぎと思おもつたこと、珍めづらしいと思おもつたことがあつたら、だれでも、そこで話はなすがいい。王おうさまは、この世よの中の不思議ふしぎなこと、珍めづらしいことを知しりたいと仰おほせらるるのだ。」といひました。

いい機嫌きげんになつて、くつろいで話はなをしていました彼かれらは、急きゆうに、静しずかになつてしまいました。そして、たがいに、顔かおを見み合あわしているばかりで、立ち上あがつて、不思議ふしぎなことや、珍めづらしいことを語かたろうとするものがありませんでした。

「なにも申しあげずに、だまつているのは、かえつて、無礼ぶれいに当あたるぞ！」と、家来けらいは、また、大きな声こえを出だして、みんなを見みまわしながらいいました。

そのとき、みすばらしいふうをした一人の男が、立ち上がりました。

「ある寒い晩のこと、私は、森の中で、眠れずに目をさましていました。すると、真夜中ごろのこと、すさまじい音がして、星が、森の中へ落ちました。私は、星が落ちたのを見たことは、はじめてです。夜の明けるのを待って、昨夜、星の落ちた場所へいつてみますと、土の中に底光りのする石がうまつていました。掘り出してみると、さるの顔に似た形をしていました……。」

このとき、王さまは、

「その石をどうした？ ……まだ、持っているか。」といわれました。

「あまり、気味のいいものでありませんから、海の中へ投げ捨ててしまいました。すると、その日から三日間ばかり、海があれたのであります……。」と、みすばらしい男は、答えました。

「やれやれ、そんな珍しいものを捨てて惜しいことをしたな。」と、王さまは、いわれたのです。

つぎに、また、みすばらしいふうをした、ほかの男が立ち上がりました。みんなは、その男が、どんな話をするだろうかとながめていました。

「北きたの小さな町まちへ、山やまから、白くましろくまが出てきたときは、町まちでは大騒おおさわぎをしました。町まちの人は、どうしても、その白くましろくまを殺ころしてしまわなければならぬといって追おいました。

白くまは、どんどん逃にげてゆきました。海うみは凍こつて、すでに氷こおりの原はらとなっていました。

くまは、氷こおりの上うえを走はしつてゆきました。すると、沖おきの方は氷こおりがわれていて、その間あいだに、黒くろい島しまが現あらわれていました。くまは氷こおりのかたまりの上うえを飛とんで、その黒くろい島しまの上うえに登のぼつてしま

しました。町まちの人々ひとびとは、そこまでは、ゆくことができませんでした。しかし、白くましろくまの上あ

がつた島しまは、くじらの背せだったのです。そのうちに、くじらは、白くましろくまを背せ中なかに乗のせたま

ま、沖おきの方ほうへだんだん動うごいていったのでした……。」

「それは、珍めづらしい話はなしだ。」と、王おうさまは、笑わらわれました。

こんどは、彼かれらの踊おどりや、唄うたを聞ききたいものだ、と、王おうさまは、仰おほせられたのであります。

「王おうさまのお許ゆるしであるから、唄うたをうたいたいものはうたい、踊おどりたいものは、おどるが

いいぞ。」と、家来けらいは伝つたえました。

彼かれらは、いろいろの唄うたをうたい、さまさまの踊おどりを、ごらんに入いれたのです。王おうさまは、

ひじょうに、ご満まん足ぞくなされて、

「ときどきこれから、こういう催もよおしをすることにいたそう。」といわれました。そして、

御殿から、外の広場へと出られて、みんなが、雪の上でもうたい、踊っているのを、ごらんぜられたのであります。

ちようど、このとき、一人の老人が、大きな袋のようなものを脊負って、破れた、マンドリンに合わせて踊っていました。その踊りも変わってれば、また、マンドリンの音も、さびしいうちになんともいえない陽気なところがある不思議な音でした。

「あの大きな袋の中には、なにがはいっているのか？」と、家来におたずねになりました。家来にも、そればかりは、わかりませんでしたから、かたわらの人々に聞きますと、やはり、だれも知っているものがありません。

「いや、たぶん、きつと珍しい宝物がはいっているのだろう……べつに、問わなくともよい。」と、王さまは、笑われて、あちらへいつてしまわれました。

やがて、踊りが終わると、乞食の一人が、おじいさんに、その袋の中には、なにがはいっているかと、たずねました。

おじいさんは、耳が遠いのか、それとも言葉が通じないのか、ただにやにや笑っているばかりです。宿なしもの一人は、おじいさんの気のつかない間に、袋のすみに小さな穴を明けて、その中のものを見ようとしました。すると、中からは小粒の黒い種子のような

ものが、こぼれてきました。

「なんだ、つまらない！」と、そのものは、つばをしました。

いつしか、日が暮れかけたので、酒もりも終わりを告げ、みんなは、ふたたびどこへともなく散つてしまったのです。

おじいさんは、大きな袋を脊負つて、広い雪の野原を通つて、破船の横たわる海岸を指して帰りました。袋のすみに、小さな穴の明いていることに気づかなかつたから、おじいさんが歩きたびに、黒い種子が、ぼろぼろと雪の上にこぼれたのです。

ちらちらと、雪が降つてきて、こぼれた黒い種子をみんな隠してしまいました。おじいさんが、袋の軽くなつたのに、はじめて、気がついたときは、どうすることもできなかったのです。

長い冬が、いつしか過ぎて夏がきました。そのとき、いままでさびしかった広い野原に、急に浮き出たように、紅・黄・白・紫、いろいろの珍しい花が、絵のごとく美しく咲き乱れたのです。

世界じゆうを、あちら、こちら、歩いて、珍しい花の種子を集めて、おじいさんは東の方の故郷へ帰る途中で、この海岸で難船したのでした。

王^{おう}さまは、その話^{はなし}を聞^きかれると、気^きの毒^{どく}に思^{おも}われ、厚^{あつ}くおじいさんをいたわられて、船^{ふね}に乗^のせて故郷^{こきやう}へ帰^{かえ}してやられました。しかし、その花^{はな}の野原^{のはら}は、いつまでも、王^{おう}さまの心^{こころ}をなぐさめたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「珍《めずら》しい酒《さか》もり」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

珍しい酒もり

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>